

開校150周年

学校だより



はえ
南風の子

中種子町立

南界小学校

令和5年10月25日(水)

秋の夜長，読書を楽しもう

校長 芝原 には

昭和35年、鹿児島県立図書館長を務めていた棕鳩十さんは、『教科書以外の本を子どもが20分間くらい読むのを、母がかたわらにすわって、静かに聞く』運動を提唱し、5月の『子どもの日』を期して『母と子の20分間読書』が始まりました。この運動は、全国に波及し、その後「親子20分間読書」へと発展していったそうです。

鹿児島県では「県子ども読書活動推進計画」を年次的に進め、令和5年度は第四次の最終年になっています。右の写真がそのパンフレットです。「1日20分読書」運動～心に残る1冊の本との出会い～をテーマに、小学生期は「多くの本を読み、読書の幅を広げることで出会おう」と取り組み方を紹介しています。

ところで、10月14日付けの南日本新聞を読まれたでしょうか。見出しは「21歳の6割『全く本読まず』(文科省22年調査)」です。この1か月に読んだ紙の書籍(本)の数を問う質問に0冊と答えたのは62.3%だったそうです。SNSや動画投稿サイトの普及が一因と考えられるものの、電子書籍なら読んでいるかというところも1か月に読んだ電子書籍の数が0冊なのは78.1%にも上るそうです。種類にもよりますが、本を読むということは、ただ単に情報を得るということとは違うと思うのですが…

「子どもが声に出して読むのを母親が聞く」から始まった親子読書運動ですが、親が幼少の子どもに本の読み聞かせをしてやるのが、脳や心の成長に好ましいことは広くいわれていることです。私が幼い頃、私を寝かしつけるために本を読んでもくれるのは必ず父親でした。父の声の方が寝付きがよかったです。親が子供に「子供が親に」読んで聞かせるどちらのパターンもできるのが小学生期ではないかと思います。そして、少し年齢が上がってきたら、家の中の同じ空間(居間)で、家族それぞれがそれぞれ好きな本を読む時間を作るのはどうでしょうか。大人も本を楽しみましょう。

読書好きの子供を育てるには、環境が大切だと思います。毎日ではなくても、時々テレビを消して家族みんなで本の世界に浸ってみてはいかがでしょうか。きっと素敵な出会いがあるはずですよ。

「1日20分読書」運動
～心に残る1冊の本との出会い～

こんなことありませんか？
自分から本を読もうとしない…
図書館や本屋へ行きたがらない…
読書の楽しさに気づかない…

中国には古くから「孟母三遷(もうぼさんせん)」という言葉があります。これは、「子どもの教育には、環境を整えることが大切である」という意味です。

子どもの成長には、環境が大切だと昔からいわれているんだね。では、読書環境はどうか、親子でチェックしてみましょう。

家庭で

- テレビ・スマホ・ゲームをやめて、読書をする日がある。
- いつも身近に本がある。
- 親子で本を紹介し合っている。

地域で

- 地域にある図書館(室)を利用したことがある。
- 地域にある図書館(室)のイベント(お話し会等)に参加したことがある。
- 図書館だよりや図書館のホームページを見たことがある。

学校等で

- 図書館の本をよく借りる。
- 図書館または先生方のお薦めの本を知っている。
- 図書館のイベントによく参加する。
- 参観日等の際に図書館へ行ったことがある。

子どもが生涯にわたる読書習慣を身に付けるためには、乳幼児期から読書に親しみ、小学生期、中学生期、高校生期へと子ども自身がその成長に応じて読書の楽しさを知ることができるよう、読書環境の整備に社会全体で取り組んでいく必要があります。
(第4次鹿児島県子ども読書活動推進計画より)

鹿児島県教育委員会